

第1章 流域の自然条件

1-1 豊川の歴史

紀元前4千年ごろの縄文式時代前期における豊川下流部は、右岸に小坂井台地、左岸に牛川・豊橋段丘の洪積層にはさまれた入海になっていたと思われる。この入海はところどころに州(自然堤防)があり、しかも遠浅であったものと考えられる。

縄文式時代の後期から弥生時代(紀元前300年～後300年)にかけて、入海内の州が発達して湿地帯となり次第に三角洲が発達していったものと考えられ、奈良時代の下流部は、所々に大きな中之島があり、潮の干満によって所々砂州が顔を出す広大な入江となっていた。また、豊川の平野が形成される過程では、その流路は幾筋にも変遷している。

豊川が初めて文書に現れたのは、承和2年(835)の「太政官符」だが、その時代には、まだ「豊川」と呼ばれておらず、美和川、穂の川、^{あぐみ}飽海川、^{あぐみ}飽海河、^{あぐみ}安久美川というように、その土地の名でもって親しみ呼ばれていた。

飽海の地が「吉田」といわれるようになってから(大永2年(1522))豊川は主に「吉田川」(姉川)と呼ばれ、地名が吉田から「豊橋」に変わってから(明治2年6月)「豊川」と呼ばれるようになったという説や、住民をうるおす豊かな川であるようにという願いをこめて「豊川」と呼ばれるようになったという説などがある。

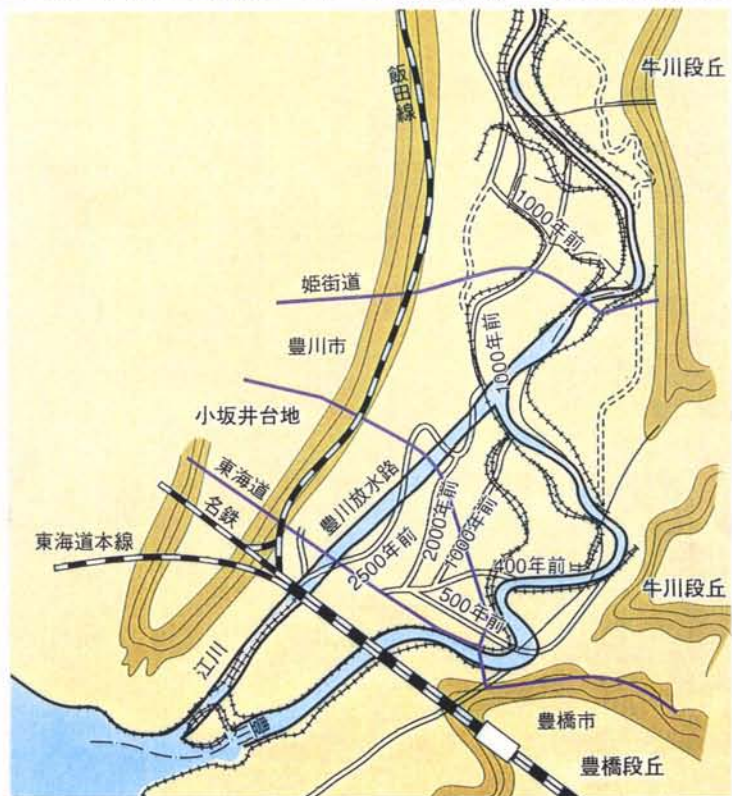


図1-1 豊川流路変遷図

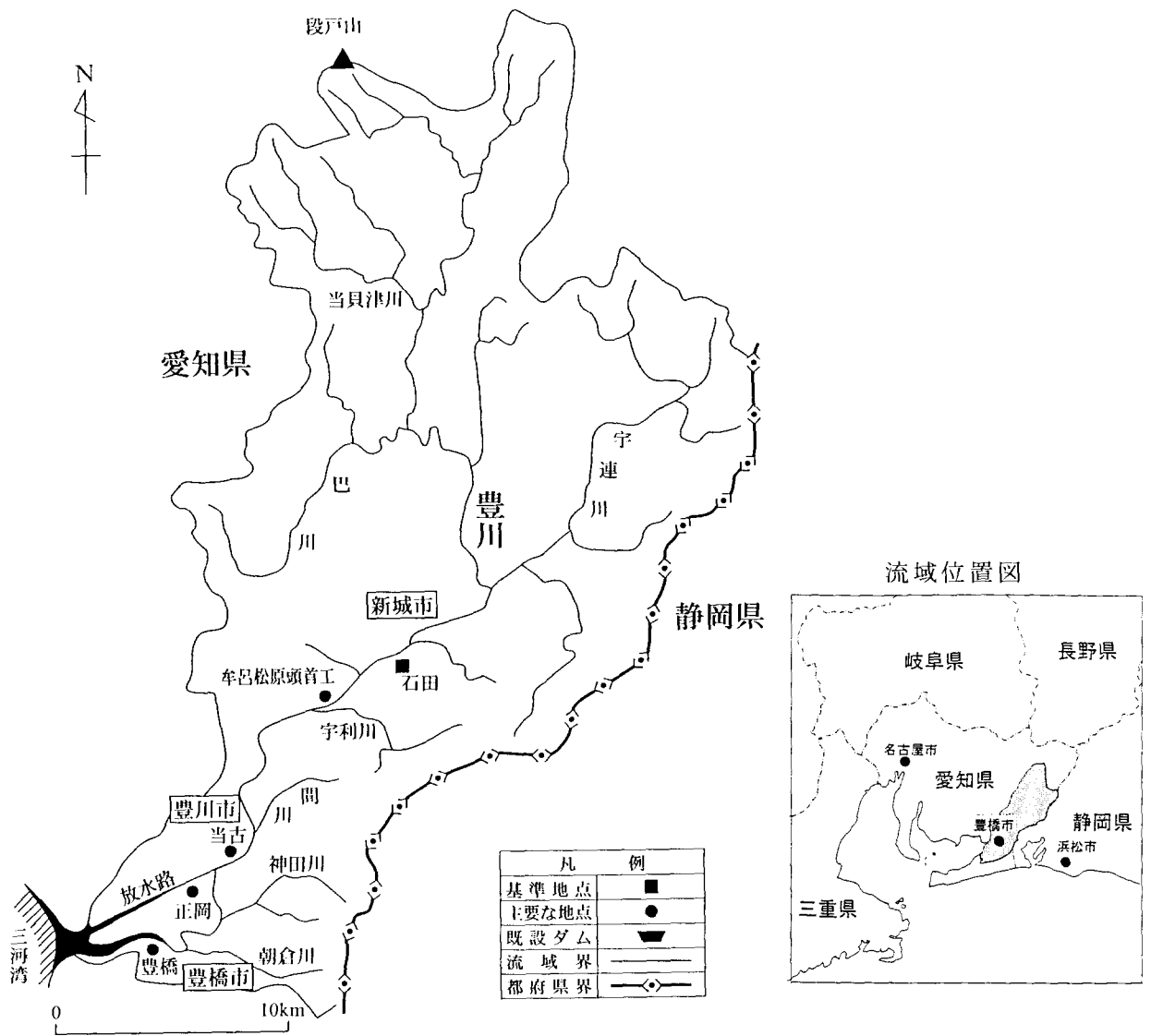


図 1 - 2 豊川流域図

表 1 - 1 流域面積一覧表

河川名	流域面積 (km ²)	流路延長 (km)	山地及び平地の比率	
			山地 (%)	平地 (%)
豊川	724.0	77.0	80	20
当貝津川	52.9	26.0	99	1
巴川	87.4	35.7	95	5
海老川	35.3	12.0	95	5
宇連川	179.9	56.4	99	1
宇利川	30.3	12.0	60	40
間川	22.2	13.7	42	58
その他	316.0	—	65	35

(河川現況調査 平成2年)

1-2 地形

豊川流域は北西部に広がる標高600～700mの起伏の少ない三河高原と、東側に連なる標高400～600mの急峻な弓張山脈に挟まれた地形を基盤に形成されている。

豊川下流域の豊橋平野は、東西両山地の間の三角形の基盤に形成された三角州、扇状地の平地であり、山地の麓には低い小坂井台地と豊川左岸段丘があり、その間に河川氾濫原の豊川低地がある。

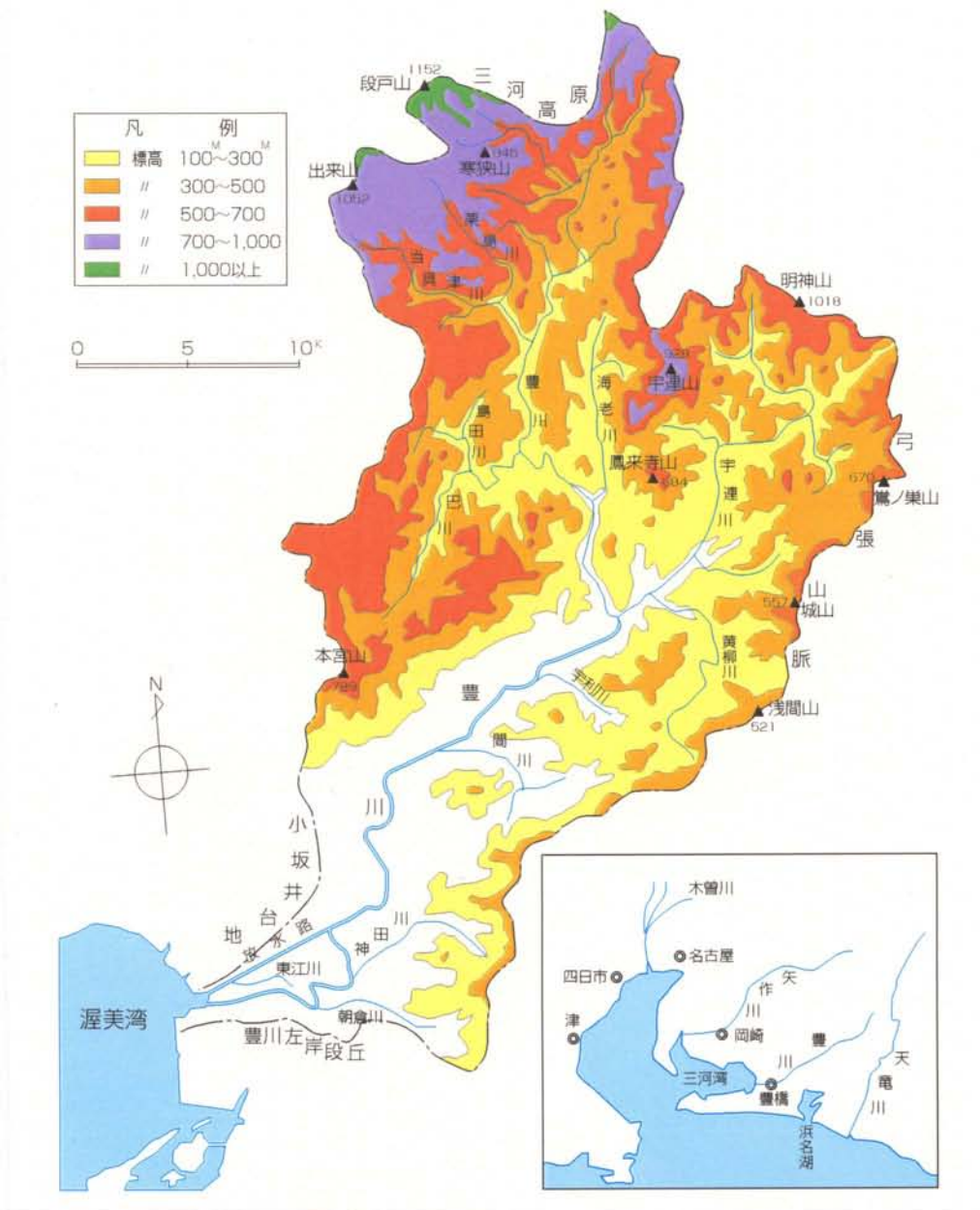


図 1-3 豊川流域地形図

1-3 地質

豊川流域には、中央構造線が東西に走り、さらに三河高原の東側には設楽火山群があるために地質的には複雑な地域となっている。豊川上流域左岸及び支川宇連川は、主として第三期古生層と結晶片岩層から構成されている。

豊川上流域右岸は、三河高原の続きであり、その地質の大部分は花崗岩、領家片麻岩及び雲母片岩からなっている。豊川下流域においては、沖積層と洪積層から成っている。

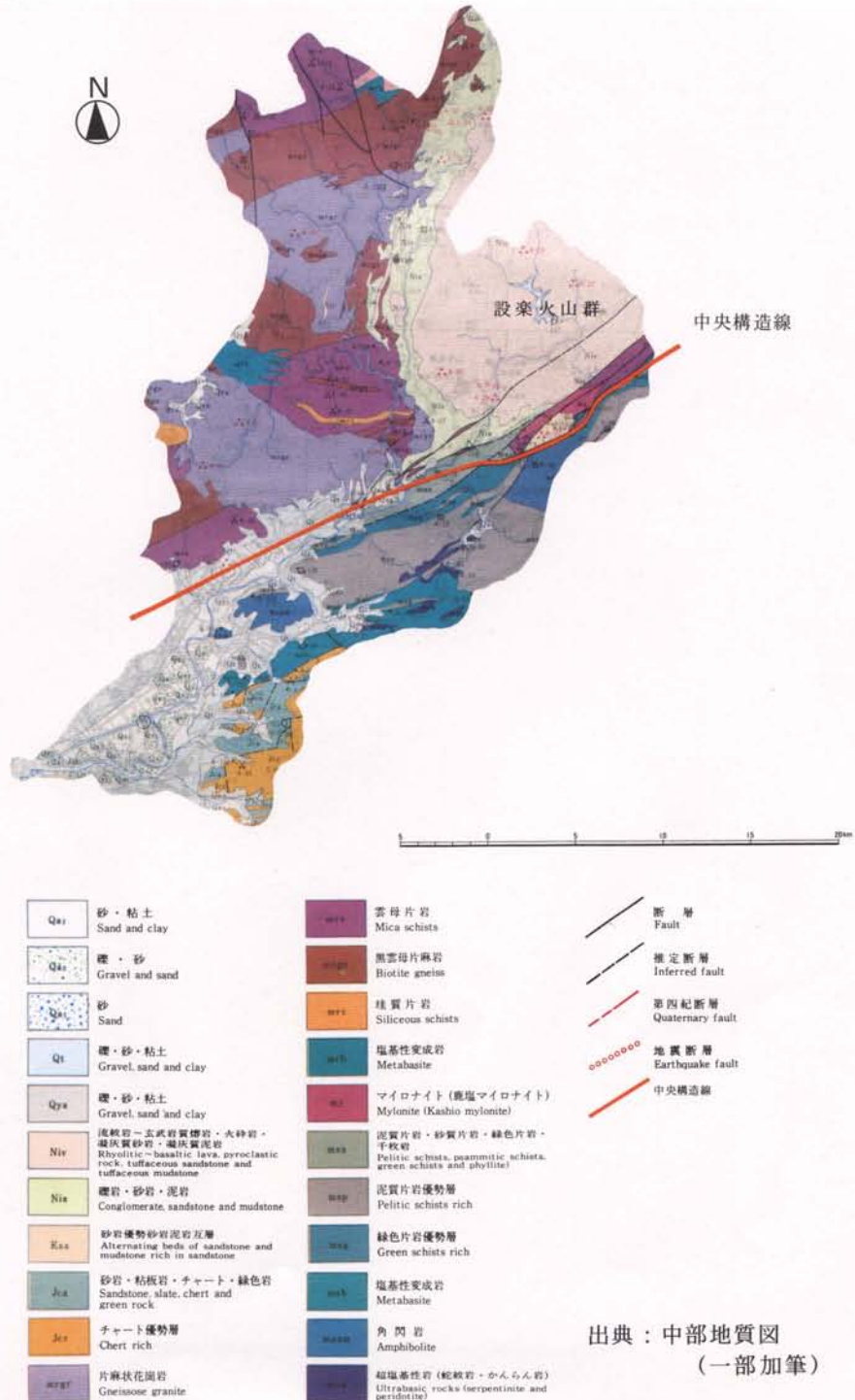


図 1-4 豊川流域地質図

1-4 気候

豊川上流部の大部分は良好な森林に覆われ、流域内の年間降水量（S36～H9）は上流域で約2,400mm、中流域で約2,200mm、下流域で約1,800mmであり、豊かな水の供給源となっており、全国レベルで比較すると多雨地域に属しており梅雨期及び台風期に降雨が集中している。

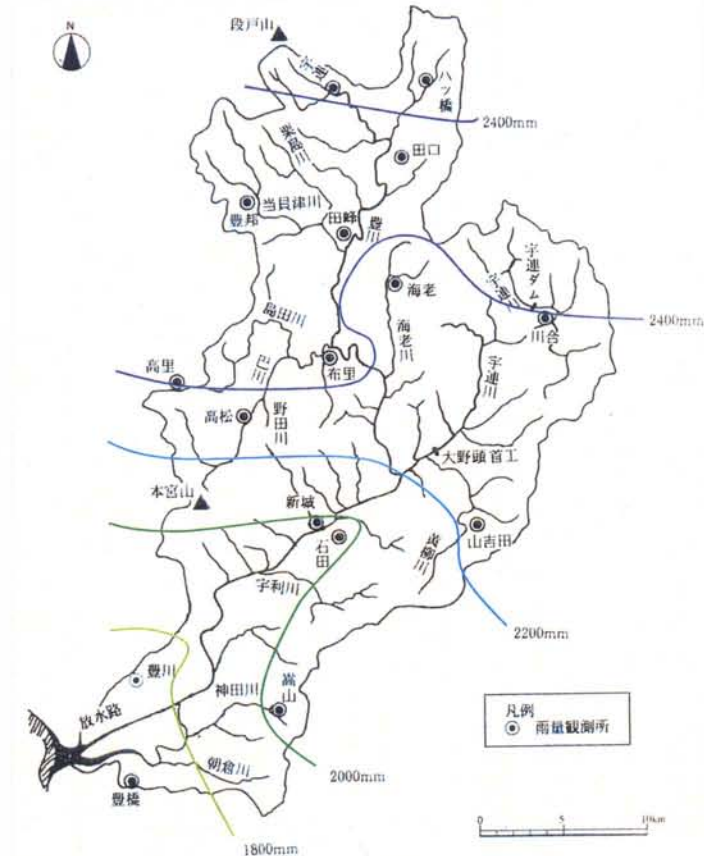


図1-5 年平均降水量分布図（S36～H9）

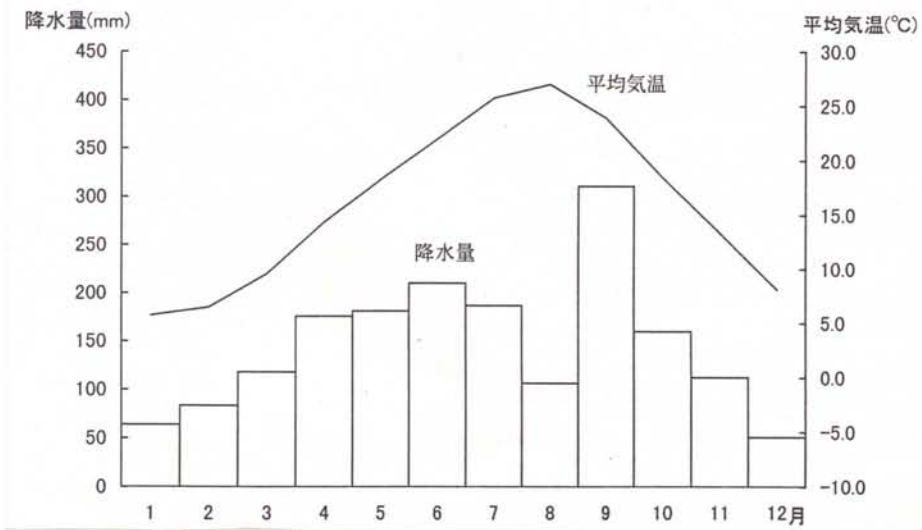


図1-6 豊橋月降水量・月平均気温（H1～H10）